

クローズアップ“火災”（8）

—消防統計からのアプローチ—

コンロ火災の話（その1）

財団法人 消防科学総合センター
主任研究員 日野 宗門

今回からしばらくは、数多くの火災原因の中でも大きな比率を占めるものを取り上げ、その実態に迫ることにしよう。

さて、建物火災の火災原因については、1～3のような特徴がみられる。

1. 建物火災ではコンロ火災が断然多い

建物火災の火災原因を上位10位まで並べてみると、コンロが断然多く、以下、タバコ、放火、ストーブと続く（図1）。

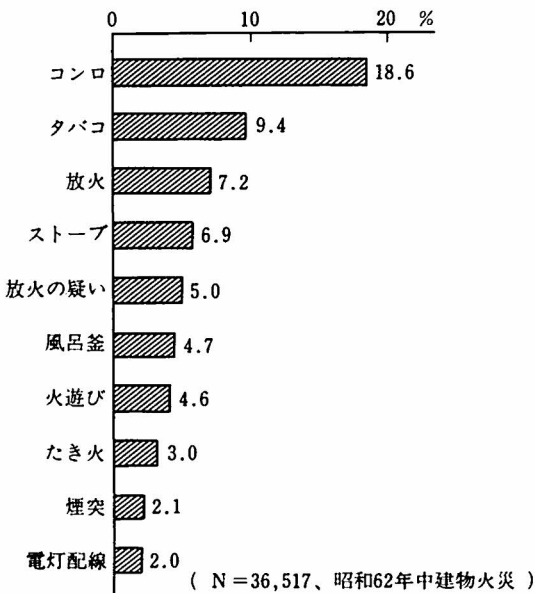


図1 原因別建物火災発生状況（上位10位）

2. 都市的地域ではコンロ、タバコ、放火（及び放火の疑い）が、非都市的地域ではたき火、煙突が相対的に多い

建物火災原因の上位10位までを、地域別（都市的地域、非都市的地域）に分けて比較すると、見出しのような結果が得られる。コンロ、タバコ以外は、何となくその理由が分かるような気がするが、皆さんはどう思われますか（図2）。

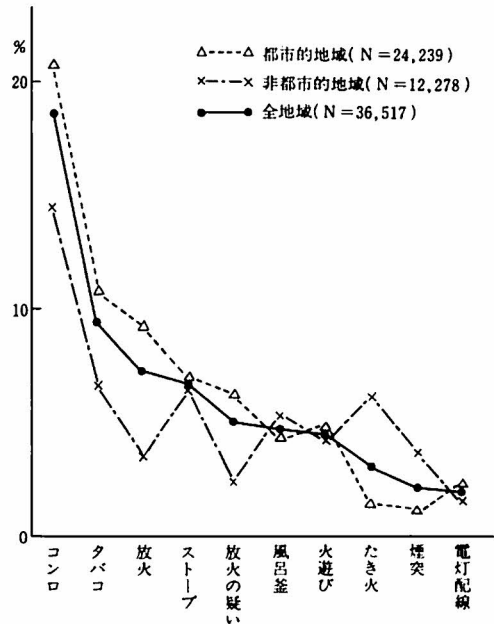


図2 地域別建物火災原因の状況（昭和62年中）

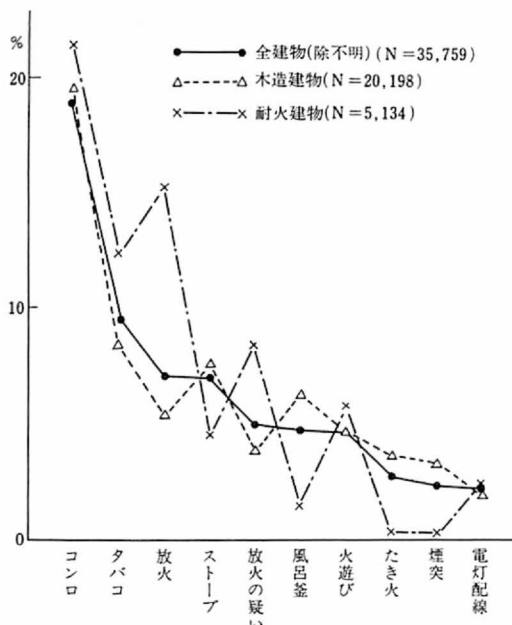


図3 建物構造別建物火災原因の状況 (昭和62年中)

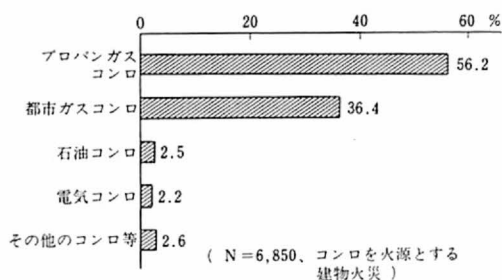


図4 種類別コンロ火災発生状況 (昭和62年中)

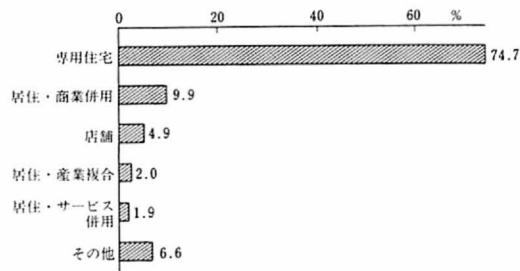


図5 火元建物用途別コンロ火災発生状況 (昭和62年中)

3. 木造建物ではストーブ、風呂釜、たき火、煙突が、耐火建物ではタバコ、放火（放火の疑い）が相対的に多い
火災原因を木造建物、耐火建物、全建物（木

造、防火木造、簡易耐火、耐火、その他の構造）別にみると絶対数では「コンロ」がいずれの場合もトップであるが、比率で比較すると見出しのような傾向がみられる（図3）。

このような差が生じるのは、建物構造上の着火危険の大小（木造建物では、「たき火」の火や火の粉が燃え移りやすいことが考えられる）や設備の状況（また、耐火建物は保温性が良いことからストーブを使用する機会は少ないと予想される。風呂釜については、木造建物では直だきあるいはこれに近い方式のものが多いと考えられる）等が影響しているものと考えられる。

前述のように、火災原因の中でコンロの占める比率はきわめて高い。そこで以下では、コンロを原因（火源）とする火災（以下、「コンロ火災」という。）の正体にアプローチしてみよう。

4. コンロ火災の大部分はプロパンガスコンロと都市ガスコンロである

コンロといっても色々あるが、火災原因の大半は普及率の高いプロパンガスコンロと都市ガスコンロであり、両者でコンロ火災の9割以上を占める（図4）。

5. コンロ火災の7割は専用住宅で発生している

コンロ火災を火元建物の用途別にみると、7割以上が「専用住宅」で発生している。なお、割合は少ないが「居住・商業併用」、「店舗」での発生もみられる（図5）。

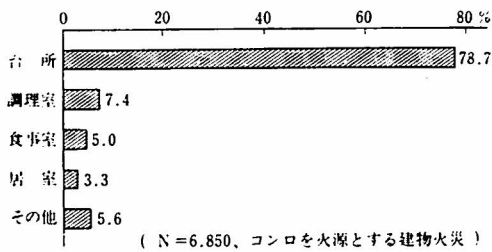


図6 出火箇所別コンロ火災発生状況 (昭和62年中)

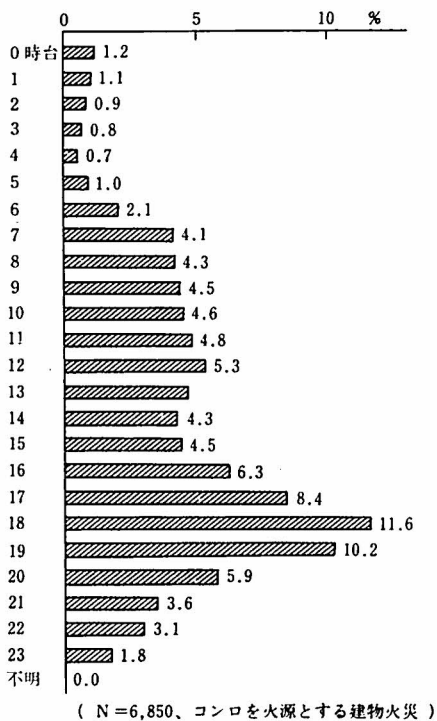


図7 出火時刻別コンロ火災発生状況

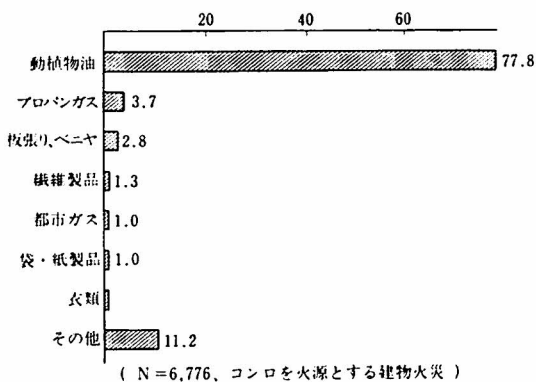


図8 着火物別コンロ火災発生状況 (昭和62年中)

6. コンロ火災の8割は台所で発生している
 コンロ火災を出火箇所別にみると、「台所」が8割弱と圧倒的に多く、その他、「食事室」、「調理室」、「居室」となっている (図6)。

7. コンロ火災は夕食時が比較的多い
 コンロ火災を出火時刻別にみると、夕食時に大きなピークがある。また、7時～15時台のコンロ火災の発生比率はほぼ4～5%の範囲にある (図7)。

8. コンロ火災の8割が天ぷら火災
 コンロ火災の8割弱が動植物油を着火物としている。即ち揚げ物料理をしていて火災を生じたものが大部分と考えられる (図8)。

9. コンロ火災の8割は放置・失念によるもの
 コンロ火災がどのような理由で着火物に燃え移り、火災を発生させたか (経過) をみると、8割強が、「放置する」、「忘れる」を理由としている (図9)。このことについては、揚げ物中の電話や訪問客等に対応して置いて放置・失念するケースが多いことが従来から指摘されている。

以上述べたことについては、既に良くご存知の方もあるかと思われるが、次回ではこれらの結果を踏まえ、コンロ火災に対し更に立ち入った考察を加えたいと思う。

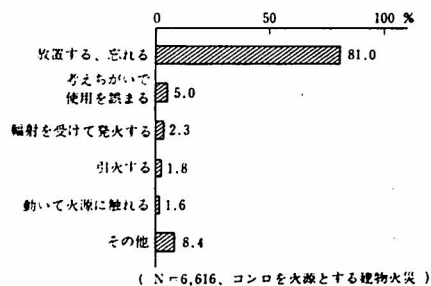


図9 理由 (経過) 別コンロ火災発生状況 (昭和62年中)